

美 術 館 だ よ り

〈展覧会紹介〉 システイーナ礼拝堂 500年祭記念	[2~3]
ミケランジェロ展－天才の軌跡	
〈イベント報告〉 「大きな絵画」展	[4]
「五十嵐彰雄と金井正夫の大きな絵画」	[4]
〈テーマ展紹介〉 「近世絵画の美」展の紹介	[5]
〈友の会活動報告〉 春の見学会報告	
〈特集〉 岡倉天心特集①	[6~7]
マンガで読む天心の時代	
〈おしらせ〉 特別館長就任のお知らせ	[8]
休館日と貸館情報	
〈次回の展覧会予告〉	
"生誕150年・没後100年記念「空前絶後の岡倉天心展」	
－大観、春草、近代日本画の名品を一堂に－"	

表紙：ミケランジェロ・ブオナローティ 《「レダ」の頭部習作》(部分) 1530年頃 赤チヨーク
(c) Associazione Culturale Metamorfosi e Casa Buonarroti



【展覧会の見どころ】

① 由緒正しきカーサ・ブオナローティのコレクション

カーサ・ブオナローティは、元来1508年ミケランジェロがフィレンツェ旧市街のギベッリーナ通りに購入し、1516年から25年まで居住した邸宅でした。現在は、一家が代々受け継いできたミケランジェロの素描、彫刻、書簡をはじめとする膨大な美術・考古・歴史コレクションと、ミケランジェロの偉業を讃えるバロック壁画の施された居室群を有する美術館として、一般公開されています。とりわけミケランジェロの素描と書簡に関しては世界一の質と量を誇り、世界的なミケランジェロ研究の拠点としても、重要な役割を果たしています。

② 日本初公開！

出品作のおよそ半数が日本初公開です。なかでも《階段の聖母》(1490年頃 大理石)や《「レダ」の頭部習作》(1530年頃 赤チョーク)は注目です。《階段の聖母》は現存するものとしては、ミケランジェロの最初期の作品の一つであり、カーサ・ブオナローティを代表する作品。《「レダ」の頭部習作》は、とある高名な美術史家をして、「イタリア素描史上最も美しいといわれる頭部の一つ」と言わしめた傑作。頬や耳などの最も細やかな部分は、ミケランジェロ本人が指で線を敢えてぼかしたとも、チョークを濡らして描いたとも考えられています。

③ 素描の魅力—未完成の美—

今回展示される多くの素描は、展覧会を彩る魅力の一つとなっています。素描といえば、完成作の前段階に位置する「未完成なもの」としてのイメージが強いかもしれませんが、しかしながら、素描には素描だけに許された「未完成の美」が認められるのです。素描には画家の習作(描く対象の研究および練習としての作)である場合、あるいは作品を制作する際の構想を描き留めたものがあります。いずれにせよ素描は画家のクリエイションに最も接近する貴重な作品といえるでしょう。また素描は線が主体です。油絵でも筆痕をわざと残すことがあります。鉛筆や木炭などを用いて描く素描は、画家の感情がダイレクトに伝わりやすく、そこには画家の息遣いさえ感じられるのです。素描に託されたミケランジェロの想いを感じてみてはいかがでしょうか。

M i c h e l a n g e l o

システィーナ礼拝堂
500年祭記念

天才の軌跡

—人類の至宝ついに来日—

2013年6月28日(金)～8月25日(日)

会場◎福井県立美術館／開館時間◎午前10時～午後6時(入場は閉館30分前まで)／休館日◎7月8日(月)、22日(月)、8月5日(月)、19日(月)／特設Webサイト◎<http://info.pref.fukui.jp/bunka/bijutukan/michelangelo/index.html>／料金◎一般1400円(団体1200円)◎高・大生1000円(団体800円)◎小・中生700円(団体500円)※団体は20名以上。障害者手帳提示者および介護者1名は半額。未就学児は無料。主催◎福井県立美術館、福井新聞社、福井テレビ／後援◎外務省、イタリア大使館、石川テレビ、富山テレビ／特別協賛◎大塚ホールディングス／学術協力◎メタモルフォジ財団、カーサ・ブオナローティ／協力◎大塚国際美術館、大塚オーミ陶業、アリタリア-イタリア航空、日本通運／企画協力◎アートプランニングレイ



《ミケランジェロの肖像》油彩、カンヴァス、
1535年以降、マルチェロ・ヴェヌスティ(帰属)



《カーサ・ブオナローティの景観》
19世紀の画家、1830年頃、リトグラフに着色



《階段の聖母》1490年頃、大理石



《「レダ」の頭部習作》1530年頃、赤チョーク

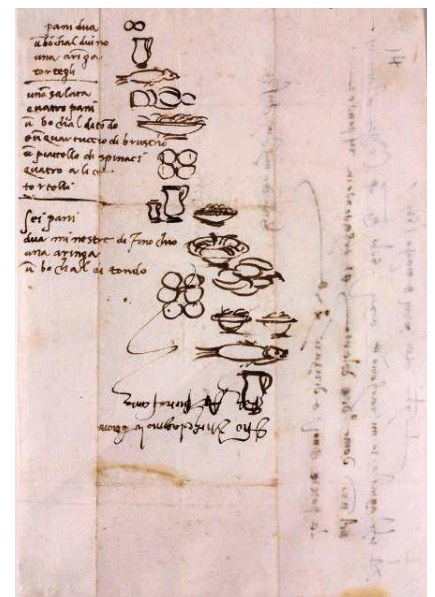
イタリア・ルネサンスの偉大なる巨匠ミケランジェロ・ブオナローティ (1475-1564)。“神のごとき”と称され、画家としてだけでなく彫刻家、建築家としても、ルネサンスの頂点を極めました。本展覧会では、ミケランジェロ作品・資料の8割を有するといわれるフィレンツェのカーサ・ブオナローティから、彼が15歳くらいで制作したとされる日本初公開の彫刻《階段の聖母》を中心に、絵画、素描、書簡など約60点を展示。89歳で亡くなるまで、精力的に活動した彼の偉大なる功績を紹介いたします。



《「最後の審判」のための習作》1533-34年頃、黒チョーク 赤チョーク



《キリストの磔刑》1563年頃、木



《食べ物のスケッチ；ミケランジェロが記した3つのメニュー》1518年、ペン

※作品はすべてフィレンツェ、カーサ・ブオナローティ所蔵 © Associazione Culturale Metamorfosi e Casa Buonarroti

「大きな絵画」

《イベント報告》

主催／福井県立美術館
2013年4月26日(金)～5月26日(日)

県立美術館では4月26日(金)から5月26日(日)まで、テーマ展「大きな絵画」を開催しました。

本展では、福井に関係する3人の現代美術作家—五十嵐彰雄、金井正夫、宇佐美圭司—による大型の平面絵画を特集展示。特に今回、五十嵐、金井両氏に特別に協力いただき、彼等の近作を含めた作家所有の絵画の数々を紹介しました。ここでは、両氏の活動を中心に紹介します。



「五十嵐彰雄と金井正夫の大きな絵画」

色彩は光の吸収と反射の差異によって成り立つが、五十嵐の絵画はその両極にある、黒と白による画面構成を特徴とする。簡素化された作風は、ミニマリズムのような還元的な表現と比較されることもある一方、色彩を排したが故に「筆跡」を浮かび上がらせる。

30代のころ、五十嵐は従来の絵の描き方を否定した。自然の中で模索し、地面の上に置いた大きな紙に鉛筆でドローイングをくり返すなど、さまざまな試行錯誤を行い、規定外の大画面に「描く」という行為そのものを顕在化させる独自の絵画手法を確立させた。その後、その方法論を用い、油彩技法を使用する白い作品群の制作へと移行している。

五十嵐のつくる大きな画面に対峙した際に感じる、ある種の重量感をともなった奥行きは、彼の「描く行為」の集積から生み出された独特のテクスチャーによる。「無数の筆触が重なり、描くことで消すことで成立する私の画面は、時間を内在した時空間の場でもある」と作者自身が語っているように、その質感は、無限の空間を体感させる強固なものとなっている。

一方、金井がつくる絵画空間は、動勢のある線と透明度の高い特徴的な色彩によって構築されている。彼の制作プロセスには、身体全体をつかった大きなストロークで線を引き、交錯させ、重ねていくといった行為の集積があり、描線と色彩が複雑に絡みあっていくつかの層を織りなしていく過程がある。

金井は「描くとき、自分の身体を超えた大きさを希求する場合があり、大きな画面はなかなかコントロールできない困難さともなうが、あえてその困難さに向きあう」と語っている。奥の層を打ち消し、手前に面をつくる。激しく色彩をぶつけあい、新たな色を置く。そうした消滅と生成を行う場として、大きな支持体が重要な意味を持っている。

結果的に、大きな画面に描かれる、ダイナミックに変化する描線と大胆に施された色面は、個々の作品に、さまざまな共鳴音が内在しているかのような奥行きと躍動感を与えている。そのひとつひとつの音色がリズムカルに溶けあった多層で多層な空間こそが、金井のつくる絵画のアイデンティティとなっている。



展示風景(五十嵐氏作品)



展示風景(金井氏作品)

※本文は、寄稿文(福井新聞、5月15日掲載)を改稿した

(学芸員 西村直樹)

◎五十嵐彰雄、金井正夫によるギャラリートーク「絵画の大きさとは何か」

【日時】5月12日(日)午後1時30分～3時 【場所】第1展示室 【講師】五十嵐彰雄、金井正夫 【司会】西村直樹

* * * *

五十嵐、金井両氏より、展示会場の作品を前に、制作の背景などについて語られました。展示されなかった過去の作品なども持ち込まれ、創作活動の変遷のポイントについて触れたり、10メートルを超える五十嵐氏の新作が紹介され絵画の大きさの意味が語られるなど、多彩な内容となりました。アーティストの生の声が聞ける貴重な機会とあって、50人ほどの参加者たちは、作家の話に熱心に耳を傾けたり直接質問をぶつけたりと、熱気溢れるギャラリートークとなりました。



ギャラリートーク



五十嵐氏



金井氏



五十嵐氏の新作披露

近世絵画の美 2013年9月7日(土)～9月29日(日)



和漢故事説話図 怪異出現

近世絵画は、百花繚乱・・・特に江戸時代は個性的な画家が揃い、他に類を見ない充実した文化熟成の時を迎えました。そのなかでも際立って異彩を放った画家が岩佐又兵衛勝以(1578～1650)です。その独自の画風は、伊藤若冲や曾我蕭白と並び称され、江戸時代を代表する画家として現在位置づけられています。

その又兵衛は元和2年(1616)年頃、越前北ノ庄(現在の福井市)に移り住み、約20年間をこの地で過ごしました。この福井在住期は彼の代表作が多く生み出された時期であり、画家としての最盛期を迎えています。

今回の展覧会は、その又兵衛作品を中心として近世絵画の美に光を当てます。又兵衛作品における最大の特徴はその人物表現にあります。肉感的な体躯、躍動感に溢れる描写は力強く、また独特な面貌表現は一度見たら忘れることはできません。当館の所蔵品を通して、近世絵画における美の広がりとお深さを実感してみても如何でしょうか。

展覧会の目玉は当館所蔵の「和漢故事説話図」です。『伊勢物語』、『源氏物語』、『平家物語』などの異なる画題をオムニバスの集めたもので、多種多様な物語を楽しむことができます。図版に挙げた作品は全12図のうち、『平治物語』に取材し、難波三郎経房を主人公として描いています。この場面は経房に生け捕られ斬首された後に雷となって復讐を狙う悪源太(源義平)と対峙する経房を描いています。豪快に水しぶきを上げる瀑布の表現は圧巻であり、その瀧を挟んで対峙する経房と悪源太の構図は緊張感に溢れ、又兵衛の画技の高さを伝える名品の一つです。

福井県立美術館

友の会

<平成25年度春の見学会> (於：大阪)

美術館友の会では毎年春と秋の年二回、県外的美術館などの展覧

会鑑賞を目的とした旅行会を開催し

ています。風が心地よく感じられる季節となった5月下旬、61名の方に参加頂き、大阪へ。大阪市立美術館では「ボストン美術館 日本美術の至宝」展を通して、海を渡った日本美術の至宝に思いを巡らせ、国際国立美術館では「美の競演 関西コレクションズ」展に陳列された西洋美術の名品を心ゆくまで鑑賞されました。参加者から以下のお言葉を頂戴しましたのでご紹介します。



大阪市立美術館の正面にて

- 「ボストン最高！何の知識のない私でも感激！もっと時間があったら良かった」
- 「なるほど、むずかしく考えないで、見たまま、思うままで感じればいい。描けないけど、作れないけど見るのは好きな 福井人です」
- 「期待に反しない内容で良かったです。中・高年向きに行程もゆったり。見る時間も確保されていて良かった」

藝術家たちの 海外武者修業

明治時代其三

黒田清輝や久米桂一郎ら
フランス仕込み明るい絵が「紫派」と呼ばれ、もてはやされたのに対し
工部美術学校系の茶褐色ベースの絵は「脂派」・旧派と呼ばれて不遇であった

ある日の小室太郎塾
不同舎にて

黒田・久米の
門下生は続々と
国費で欧州留学
が決まっているらしいぞ

素寒貧の
俺たちには
全くつまらない
話だな

中川八郎

吉田博

しかしこんな朗報が！
自分の水彩画が意外にも
西洋人に受ける気がついた
三宅克己が明治三〇年に渡米し
現地で開いた個展が大成功したのだ。

東洋の作家だって？
ヨーロッパの画家かと思ったよ
値段もこなれていて
いいですね
こう、牧歌的で
心やすらぐじゃないか

三宅は売上金を旅費に欧州を
巡り意気揚々と帰国した。
この冒険的渡米は、日本でも
大変な評判を呼び、自力で欧州へ
行く一つの可能性が示されたのだった。

俺たちも
米国経由で
欧州へ行くぞ

皿洗いだって
ガラス拭きだって
やってやろう！

明治三十二年、吉田博、中川八郎は
片道切符と一ヶ月分の生活費を手
に渡米。仲間の洋画家も後に続いた。

生きて再び日本の地を踏めるのか
そんなこと分かるはずもなかった

ところがたまたま二人の絵を見て、
館長が入ってくれたデトロイトの美術館の
この展覧会をはじめ、各地で成功を収めた
二人は欧州経由で帰国したのだった。

我々
額縁ナイ

ハハハ
こちらで用意
しますよ

新興米国で稼いでから欧州へという、
冒険的方法の達成者がまたもや出たのである。

明治三十七年、ボストン美術館の仕事がある
天心、六角紫水とともに、天心の弟子の
横山大観、菱田春草が渡米した。
農商務省の留学生（おそらく天心のコレ）として
多少の補助はあったろうが、基本、現地で展覧会
を開いて資金を得るつもりであった。

たまに病気になったり
階段から落ちて寝込んだり
はかばか大変な旅ぞろぞろ

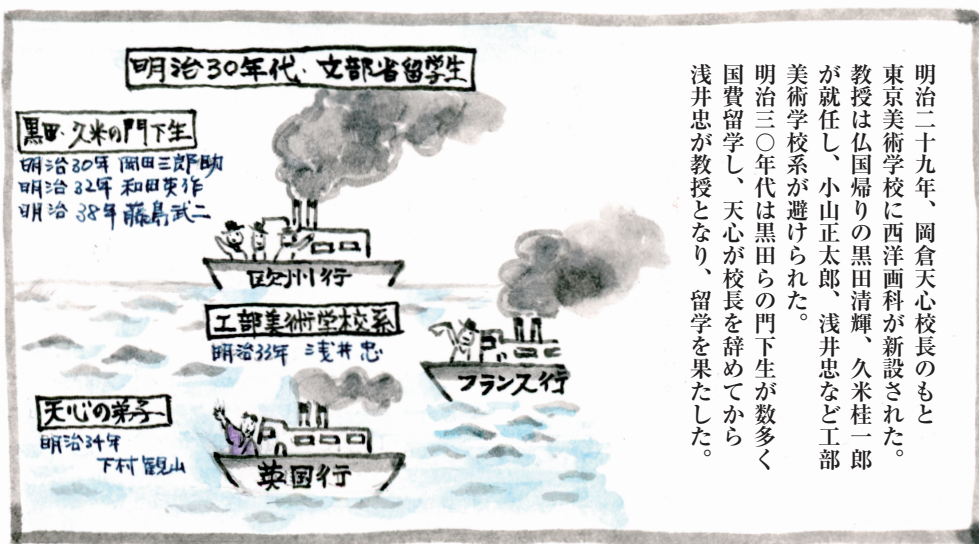
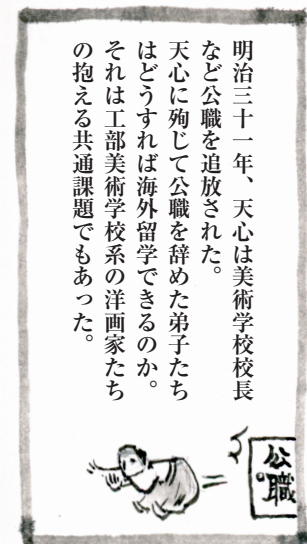
調子はどう？
横山大観
菱田春草
ホテルで作画中

二人は天心の人脈で、
各地で展覧会を開き多額の資金を得、
古今の芸術に触れるため欧州に渡った。

欧州のなかでは
英国の美術が最優等だと
思わないかい？
岡倉先生も
そう言っているね

後に画壇をリードするようになるのは
彼らのような困難な時代に海を渡って
知見を広めた青年たちなのであった。

「岡倉天心特集 ①」 - マンガで読む天心の時代 -



II 特別館長就任のお知らせ



特別館長 手塚 雄二 氏（てづか・ゆうじ）

今年4月1日付で日本美術院の同人・理事であり、東京芸術大学教授の手塚雄二氏が、西川一誠知事の要請により、当館の特別館長に就任しました。昭和28年神奈川県に生まれ、昭和51年には東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻に入学し平山郁夫氏に師事しました。在学中に第34回春の院展に初出品、初入選し、以後院展の中心作家として活躍しています。そして現在は東京藝術大学において後進の指導にあたっています。

特別館長として今後は当館開催の展覧会における質の向上や、収蔵品の充実に取り組む予定です。また鑑賞教育を重視した教育普及にも積極的に取り組む方針です。美術館運営に対して多角的な視点をもって見つめ直し、適正な指導を行うことで美術館の発展を目指していきます。

お知らせ

◎7月～9月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、次の日は休館とさせていただきますのでご了承ください。

7月8日(月)、22日(月)、8月5日(月)、19日(月)、26日(月)～9月5日(木)、9日(月)、30日(月)
(8月29日(木)～9月3日(火)は燻蒸の為、本館内立入禁止)

貸館情報 [7/1～9/29]

9/6～9/8	● 第43回若越書道会展	9/19～9/23	● 第13回力力・斜展
9/10～9/16	● 「自選画集刊行記念一松山幾三郎展」	9/20～9/23	● 金沢美術工芸大学同窓会福井支部展
9/12～9/16	● 第16回グループ「青い扉」パステル画展	9/26～9/29	● 第2回シルバー福井美術展
9/13～9/16	● 第54回九龍社書展	9/26～9/29	● 柴田美重子教室パッチワーク作品展
9/18～9/23	● 彩華水墨画個展	9/26～9/29	● 第9回アトリエ羊庵展
9/18～9/23	● 日本画と能面の二人展	9/26～9/29	● 第20回記念移山会書作展

福井県立美術館 次回の企画展案内

生誕150年・没後100年記念「空前絶後の岡倉天心展」

―大観、春草、近代日本画の名品を一堂に―

本展は平成25年が天心の生誕150年、没後100年にあたるのを機に開催します。行政官、教育者として文化行政や美術教育の基礎を確立させた手腕、思想家として世界に広く東洋文化を発信した業績、新しい日本画を目指し設立した日本美術院での天心と弟子たちの挑戦について、豊富な作品・資料で紹介するものです。そして天心の多分野における活躍と業績について、福井との接点に焦点を当てつつ紹介します。

会 期：2013年 11月1日(金)～12月1日(日)
開館時間：午前10時～午後6時（入場は閉館30分前まで）
開館時間：11月11日(月)、18日(月)、25日(月)
観 覧 料：一 般/1000円(団体800円)
高・大生/ 700円(団体560円)
小・中生/ 500円(団体400円)

※団体は30名以上。未就学児は無料。障害者手帳提示者および介護者1名は半額。



菱田春草「王昭君図」(部分、重要文化財)
善寶寺蔵